

UNNキャンパス原稿書式

川との関わりについて

NPO法人うつくしまNPOネットワーク
副理事長 相楽昌男

▼【環境活動のきっかけ】1997年まで仕事で農産物の低温貯蔵施設建設やソーラーシステム住宅の開発をしていました。環境建築のPLEA国際会議IN鉏路に参加後、個人事業をスタートしました。その時ちょうど、北上川起点にして東京までの江戸時代の水の道を辿りながら地域連携軸を蘇らせようとする「東日本水回廊構想」に参加しました。阿武隈川を会場にしたときは、私が地元へ参加を呼掛け、カヌーなど数十隻で川下りを楽しみました。川から見る自然の豊かさに、感動したことが昨日のこのようです。

▼【りばあふれんど発足】川の活動がきっかけで「逢瀬川の川づくりをみんなで考える会」に委員として参加。洪水対策と桜並木の両立を模索している中、一人で川の中のゴミ拾いを13年間続けている撞井恒夫委員に感銘を受け、案内され川の中に入りゴミ拾い。撞井さんの「はまるよ」という言葉の通り、ゴミよりも川の中に大いなる自然を感じました。有志と任意団体を設立し、定期的に撞井さんと川の中のゴミ拾い活動を開始し、20年ほど継続。大人から子どもまで、時には50名ほどで自然体験しながら実施しました。

▼【川塾交流活動】川がきれいになると沿川を散歩する人が増え、ゴミ捨てが減ります。この魅力を子どもたちに伝えたいと思い、まずは安心して川体験ができるように、逢瀬川リバーマスタースクール河川環境人材育成講座を逢瀬川ふれあい通り実行委員会とNPO法人ひたかみ水の里の共催で数年実施し22名を養成しました。2004年から震災まで、石巻と川塾交流を続けることができ、たくさんの親子に安心して川で遊べる方法を伝えることができました。

▼【思い出深いこと】胴長をはいて川のゴミ拾いの後毎回、撞井さんとの会話が楽しみでした。言葉には胸にしみこむ深い思いが感じられました。何かを批判するより、川に触れてもっと大事なことに気付いて欲しい、という思いが伝わってきました。「川の流れは地球が活着ている証。人間がこれからどうするかを川はじっと見ている。自然から得られる深い哲学を感じました。

▼【学びと気づき】川から始まった活動が多様な活動になりました。ビオトープ、ユニバーサルデザイン、森の活動、環境建築などの活動から、「SDGs」という言葉の通り多面的に物事を見る大切さを感じています。多面的にみる目を育てるためには、継続的で多様な自然体験が欠かせません。そのような貴重な機会が減っているのではと危惧しています。毎年多くの子どもの水難事故が起きています。自然という無限の世界を見つめることを大切に次の世代にサポートしたいと思います。

(2023年11月2日記)